

児童虐待問題はどのようにとらえられているか
～ 大学生へのアンケート調査を手がかりとして～

立命館大学応用人間科学研究科
臨床心理学領域
西村 健吾

近年、児童虐待に対する社会的関心はますます高まりつつある。しかし、これまでの虐待問題においては、専門家や援助職者の研究や活動からみても、彼らが世の中に出している書物の数々をみても、その予防に一般の人々が被援助者や援助者として対象となることは少なかった。本研究では、これまで、焦点が当てられていなかった虐待に対する大学生の意識を調査・検討することで、彼ら自身が現在虐待をどのようにとらえているのかを知り、虐待予防の対象者として彼らへの理解を深めることを目的とした。

予備調査は、第 1 に、大学生の児童虐待に対する意識を大まかに掴むこと、第 2 に、調査で得た質的データを基に本研究で使用する質問紙を作成すること、を目的として実施した。R 大学の文系学生 1 ～ 4 年 40 人。全体の平均年齢は 19.9 才（標準偏差 1.30）を対象に、自由記述形式の質問紙を用いて、個別配布個別回収型式でデータを収集した。

本調査では、予備調査で得られた質的データを基に「大学生の虐待に対する意識」を量的に捉えること、また、収集した量的データを分析・考察することで、大学生が虐待に対しどのような知識や感情、考えを持ち、虐待とどのように向き合おうとしているかを探り、児童虐待問題に取り組む際の足がかりを模索することを目的として実施した。調査対象者は R 大学の文系学生 1 ～ 4 年 140 人。全体の平均年齢は 20.4 才（標準偏差 1.52）。

予備調査によって得たデータをもとに作成した質問紙を用い、5 つのテーマに振り分けた 74 項目と、参考データ収集のため付加した 2 項目を合わせた計 76 項目について回答を得た。各質問項目では「あてはまらない（1）」から「あてはまる（5）」までの 5 件法で回答を得ているが、結果分析に際しては、1 または 2 のいずれかを選択した回答をまとめて「否定派」、3 を選択した回答を「どちらでもない」、4 または 5 のいずれかを選択した回答を「肯定派」として再集計し（本文、または巻末資料で掲載した各項目における回答率を示すグラフは全て 5 件法によって構成されている）、各項目における回答対象者全体の回答率を算出、それらの比率の有意差の有無を²検定・多重比較を用いて分析し、さらに男女の回答比率を²検定・残差分析を用い比較・検討した。

分析の結果、大学生の虐待そのものに対する意識、加害者である親に対しての意識、被害者である子どもに対する意識、自己の虐待についての意識、社会・地域に対する意識についての知見が得られた。